

令和3年度

# 幼稚園だより 6月号



文京区立千駄木幼稚園

## 園庭で様々な人と出会うこと

副園長 西郡 千晴

園内の樹木の若葉が色濃くなりはじめ『土と緑の千駄木幼稚園』というフレーズを実感する日々です。梅雨の季節を迎えますが、外の様子に敏感な子どもたちは雨の合間を見付けると、すかさず園庭に飛び出してきます。雨上がりの園庭は、土の匂いや草花の香りに包まれて心地よいものです。年少組の子どもたちも砂場から滑り台などの遊具があるチャレンジ広場、自由に摘んでもよい花のあるプランターの周りなど園庭のいろいろな場所で遊ぶようになり、広々とした園庭のどこを見ても賑わいが見られます。

学年の枠を越えた関わりが当たり前のように見られる園庭は、子どもたちのコミュニケーション力を育む大切な場となっていることを実感します。学級の担任はもちろんのこと、他学級、他学年の先生や主事、支援員の先生など幼稚園の中で当たり前の環境の一部である大人たちも様々な子どもたちと楽しみながら関わります。昨年の様子をよく知る先生は「あんなこともできるようになったのか」と成長を実感し、初めて出会う先生は人懐こく話かける子どもたちに「親しみをもって関わってくれて嬉しい」と微笑ましい場面が見られます。そして、子ども同士の関わりもたくさんあります。同じ学級にかかわらず、偶然同じ三輪車に乗ろうと思った、たまたま同じモンシロチョウを追いかけていた、ちょうど同じ花を摘もうと思って手を出したなど、同じ場に居合わせた幼児がそこで初めて関わった時の表現は様々で、必ずちょっとしたドラマが起こります。互いに微笑み合うような関わりもあれば、「僕が先に見付けた」と一触即発ドキドキすることもあります。どの関わりも出会うことに意味があり、関わり方を学ぶチャンスにつながります。その後どのように思うか、どのように相手に応じるかなど経験を重ねながら人との距離感や場に合うふさわしい関わり方を学びます。子どもたちにとって様々な人と関わることは社会性を育む大事な機会です。コロナ禍で不特定多数の人と関わるのが難しい昨今の状況ですので、家族以外の人と関わる経験が培われる場として、幼稚園という環境の大切さを痛感しています。一つ一つの出会いを大切に、どうするとよいのか答えを急がずに同じような経験を何度も繰り返しながら、互いに心地よいと思える関わりができるような子どもたちに育てて欲しいと思います。



じっと地面を見ている年中児と年少児